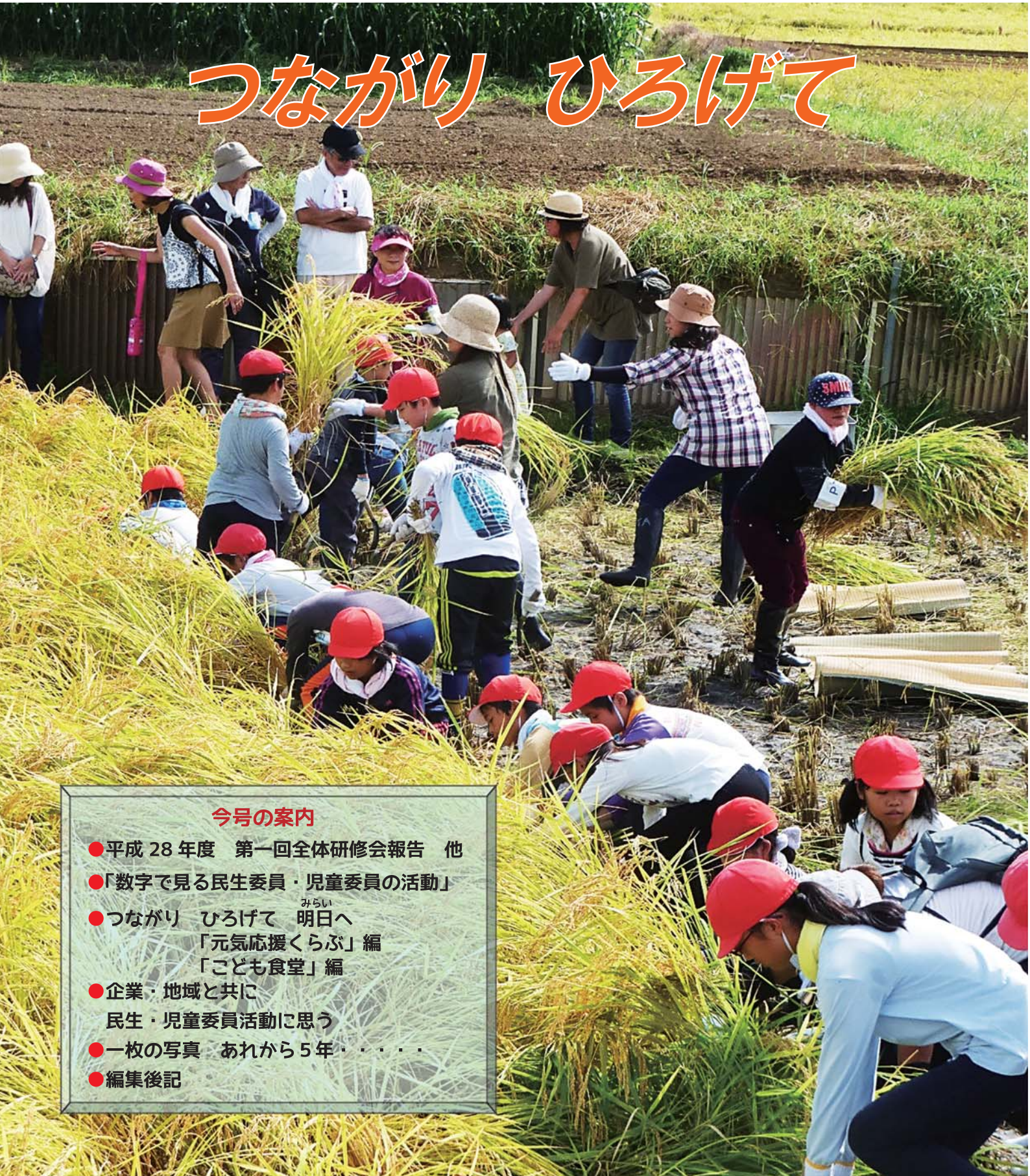
松戸市民児協だより

愛の小鳩

2016/11
No.54
［年2回発行］
編集と発行＝千葉県松戸市民生委員児童委員協議会（松戸市役所地域福祉課　047-366-3019）



つながり　ひろげて

今号の案内

●平成 28 年度　第一回全体研修会報告　他
●「数字で見る民生委員・児童委員の活動」
●つながり　ひろげて　明日（みらい）へ
　「元気応援くらぶ」編
　「こども食堂」編
●企業・地域と共に
　民生・児童委員活動に思う
●一枚の写真　あれから５年・・・・・
●編集後記

平成28年度 第一回 全体研修会報告

平成28年8月26日（金）松戸市民会館に於いて、平成28年度第一回全体研修会が開催されました。

平川会長の挨拶に続き本郷谷市長の講話があり、松戸市の今後の構想をいろいろと話されました。

今回の研修では高齢者福祉と児童福祉の二つのテーマを一部、二部と分けて盛りだくさんの内容で行われました。

「小さなことからコツコツと」

第一部では『いつまでも住み慣れた地域で暮らすために～「できること」から積み上げる松戸市の高齢者福祉』というテーマで松戸市福祉長寿部審議監の草野哲也さんが講演されました。

松戸市も急速な高齢化が進んでおり他人事ではありません。10年後には75歳以上の人口が急増するという推計があり、現在毎年20億円程度づつ膨らむ介護保険費用が更に増え大きな影響を及ぼすと予想されます。

そこで地域を巻き込み、地域全体で高齢者を支える施策として地域包括ケアシステムという構想が生まれました。

この地域包括ケアシステムには勿論民生委員も組み込まれており、今後の民生委員活動にどの程度影響してくるのかも気になるところです。

最後に「小さなことからコツコツと」という表題で『無理のない範囲で、小さなことで良いので、高齢者福祉のために「できること」を行っていく』『高齢者福祉にかかわる多くの関係者や行政が「できること」を積み上げることで、地域包括ケアシステムに向けた「大きな力」を生み出すことができる（例えば、地域ケア会議）』、『福祉・地域や医療・介護にかかわる幅広い関係者が参加して積み上げた「地域包括ケア」は、簡単には崩れない』と締め括りました。

「切れ目のない児童福祉支援」

第二部は『児童福祉の観点から松戸市の取り組みと民生委員・児童委員の役割』というテーマについて松戸市子ども部参事監胡内敦司さんの講演でした。

はじめに児童虐待に関する資料がスクリーンに映し出され、図表の数々はどれも好ましくない数値が並んでいました。毎年のように児童虐待の相談件数は増加しており、また、県内でも松戸市の相談受付件数が多いというのもちょっと驚きました。

国は児童福祉法等改正法案の提出を目指しており、この中に「要保護児童対策地域協議会（略称・要対協）を市町村に設置するよう求めておりこの要対協にも民生委員が組み込まれていることは言うまでもありません。

また、最近ようやくマスコミも取り上げ、知られてくるようになった子どもの貧困についての話もひとり親世帯・生活保護世帯・養護施設の子ども、これらの子どもが全世帯の大学進学率が低いというデータを見て教育がすべての子どもに均等に行き渡ってはいないということを再認識しました。

こうした子どもの貧困対策として松戸市では今年の一月に「子ども未来応援検討チーム」を設置しています。

さらに妊娠期から子育て期にわたるまで切れ目のない支援を実施するため「親子健やかセンター」を今年の四月に開設しました。

三時間ほどの講演会でしたが、高齢者から子どもたちまで私達民生委員・児童委員にとっては誠に盛りだくさんの勉強をする講演会でした。

来年は 民生委員制度 創設百周年

民生委員制度の源は大正6年（1917年）に始まり来年で百年となります。

岡山県で「済世顧問制度」として始まり、その翌年、大阪府で「方面委員制度」が発足し全国に広まりました。昭和21年に厚生省の社会事業法公布に伴い民生委員令が発布され、これにより「方面委員」は「民生委員」と改称され、翌22年の児童福祉法で児童委員は民生委員・児童委員となりました。

こうして当初より生活困窮者の支援に取り組み、戦後以降は社会の大きな変革の波に合った社会福祉を目指し地域に根差した活動をしています。

おめでとうございます

平成28年度表彰

全国民生委員児童委員連合会・会長表彰

(永年勤続 民生･児童委員 17年以上)

明第一	地区	青木　菊子
明第二	地区	毛利　多壽子
明第三	地区	古宮　雅代
明第四	地区	滝　紀代子
明第四	地区	田中　清子
馬　橋	地区	榎本　好昭
新松戸	地区	加藤　桂子
高　木	地区	山本　愛子
五　香	地区	中村　康子
六　実	地区	柴田　時子
六　実	地区	松澤　陽子

表彰は、10月20～21日の第85回全国民生委員児童委員大会香川県大会で行われました。

「数字で見る民生委員・児童委員の活動」

民生委員・児童委員は、毎月一回活動状況を報告しています。この日々の活動を記録した活動記録は、厚生労働省に報告、集計され、現状把握の上、将来の福祉施策の計画実施の参考にされ民生委員活動に役立てられます。

平成28年度の総会資料から松戸市民生委員児童委員の一年間の活動データ(平成27年1月~12月)から、データの記載が始まった平成24年度の総会資料(平成23年1月~12月)の五年間のデータをそれぞれの年の全国のデータと比較してみました。

図1.内容別・相談支援 (件数/一人・年)

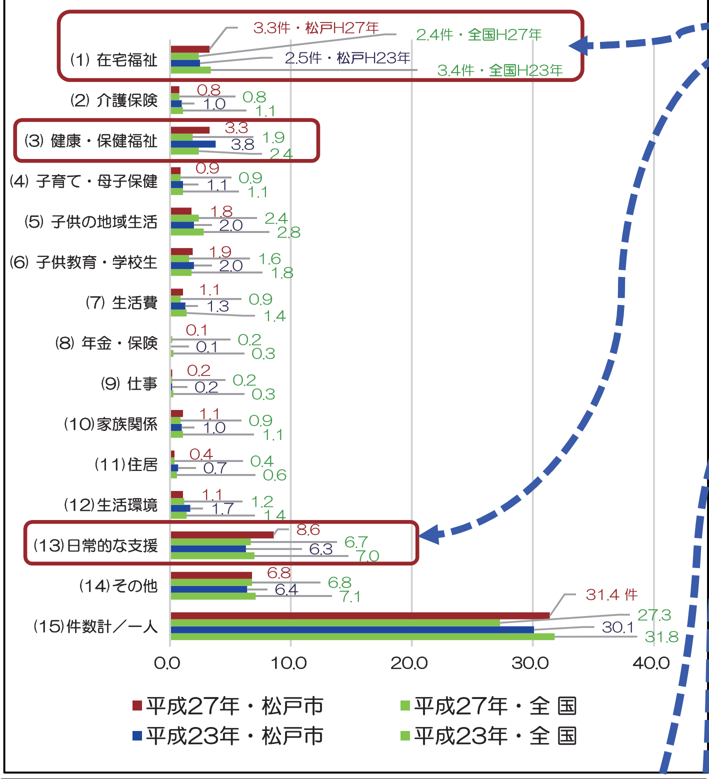


図2.分野別・相談支援 (件数/一人・年)

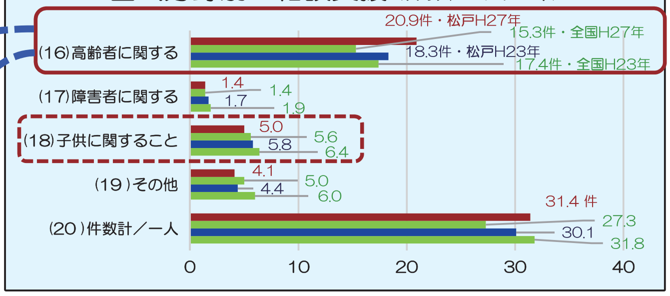


図3.活動内容 (件数/一人・年)

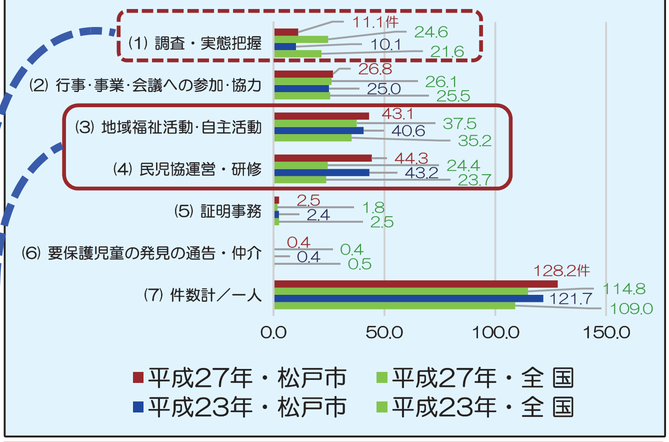


図4.訪問・連絡調整 回数他 (件数/一人・年)

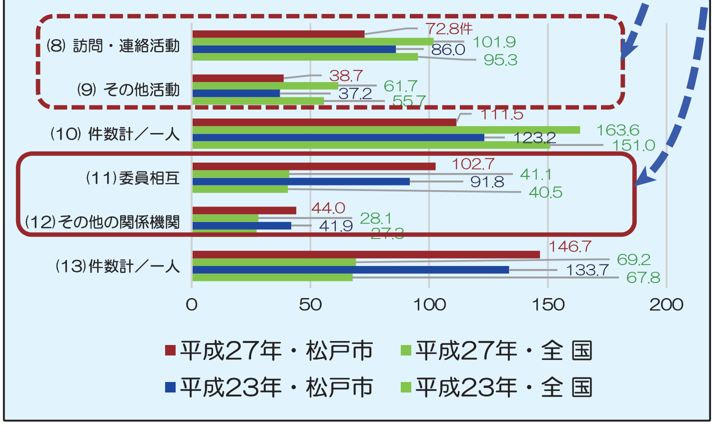


表. 活動日数(日/一人・年)

	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
松戸市	(日/一人・年) 154.2	(日/一人・年) 155.6	(日/一人・年) 156.4	(日/一人・年) 155.2	(日/一人・年) 152.9
全国	129.7	129.9	132.3	130.5	128.8

皆様、日頃の活動ご苦労さまです

これまでの5年間では松戸市・全国それぞれのデータ共、若干の変動で収まっていますが、グラフを見ていると松戸市の民生委員活動の全体の印象として多くの活動において少しづつではありますが活動の増加が認められるのがわかります。

図1の内容別・分野別のグラフでは**在宅福祉や日常的な支援**の増加があり、これは図2の分野別・相談支援のグラフの**高齢者に関する項目**の増加に反映されていることに関係があるようです。

図3の活動内容のグラフでは**地域福祉活動・自主活動や民児協運営・研修**の増加が見られ、またそれは全国のデータより多くなっています。それに比べ**調査・実態把握**が全国のデータと比べ少ないのはなぜでしょうか？時間が多く取られているのは、全国的に見れば、松戸市は都市型活動になっているように思われます。

図4の訪問回数・連絡調整回数のグラフでは訪問活動は若干の減少傾向はみられるものの**連絡調整回数**は全国のデータを悠に凌いでいます。これは松戸の民生委員が一人で活動するのではなく仲間の多くの民生委員と繋がって**ホウ・レン・ソウ**（報告・連絡・相談）をまめにやっている表れでしょう。

最後の**表の活動日数**は、全国は130日前後ですが、**松戸市の民生委員**は毎年150日を超えています。およそ一年の半分を民生委員活動に費やしていることです。

皆様ご苦労様です。

つながり　ひろげて　明日(みらい)へ　「元気応援くらぶ」編

松戸市では、高齢の方が気軽に出かけ、人とのふれあいや元気づくり（介護予防）ができる場や機会がある地域づくりを推進しています。住民自身が主体的に運営する「通いの場」を作るために、今年度より市の事業（3ヶ年にかけて市が補助）として「元気応援くらぶ」が始められました。

今回この事業をきっかけに、市内22ヶ所に新たに「通いの場」が開設されました。その中の「サロン二ツ木」、「小金原6-7元気くらぶ」及び「小金原九丁目ひばりの会（憩いのサロン）」の3ヶ所を取材しました。いずれのサロンも民生委員の人たちが深く関わっており、民生委員活動の一環として紹介します。

元気サロン　二ツ木

去る7月14日、元気サロン二ツ木を訪問取材し運営責任者の方に寄稿いただきました。

当サロンは、市の元気応援くらぶプロジェクトの支援を受けて平成28年3月スタートした町会支援型の高齢者支援組織。発起人を兼ねる会員は、町会役員9人、民生委員、民生委員経験者、高齢者支援連絡員、ボランティア経験者、介護ヘルパー有資格者など9人の計18人。

当二ツ木地区は、これまで、会館などの「場」が無く、特に高齢者が気楽に集まって会話を交わすなどの機会を作る事が出来なかった。町会としても、会員の高齢化への対応、高齢者の健康寿命延伸などのために、先ずそのための組織と、「場」を確保したいと考えていたが、あたかも平成28年2月、市介護制度改革課から、元気応援くらぶプロジェクト構想が公開された。市の補助金支給を含めた全面支援が受けられる事から、このプロジェクトに応募し認定を受け発起人会を会員組織に切り替えて発足した。

当初の補助金は、その殆どをスタートに当たって必要な、備品類（大型液晶テレビ、麻雀セット、囲碁セットなど）の購入に充てた。開催時の費用は参加者からその都度徴収する二百円の会費収入を、会場費千五百円、コーヒー・菓子などの購入に充てる。従って参加者の多寡は収支に直結するので、毎回一定の参加者を確保出来るようにスタッフ一同で広報に努めている。

サロンは毎週木曜日午後、蘇羽鷹神社会館を借用し開催。メニューは、麻雀・ラミーゲーム・囲碁などのゲーム、二ツ木シアターと称する映画会などの定例メニューと、おしゃべり会、団扇作り、煎茶手前、大人のぬりえ、マジックショーなど広く参加者に楽しんで貰える単発的なメニューを組み合わせて開催、毎回平均20人程度の参加がある。

当サロンの特徴は、町会支援型、地域非限定、年齢・性別非限定、会員・非会員（サービスする人、される人）無区分にある。

今後の課題としては、占有（出来れば常設）可能な場所の確保、運営組織の確立、収支基準の確立などがあげられる。当サロンでは、スタッフ6人からなる運営検討委員会を設け、上記長期的な課題の他、当面のメニューをはじめ、今後の方針、役割分担などを決めている。

小金原6-7元気くらぶ

元気くらぶ立ち上げのきっかけ

高齢化の中で、いつまでも健康で楽しく生きたいと感じていたところ、広報まつどに「通所型元気応援くらぶ」募集が掲載されていたのを見て共感した6名が、事業説明会に参加したのが始まりである。

スタート時期

平成28年2月25日、市からの採択通知を受け、あわただしい準備期間を経て、4月8日に「小金原6－7元気くらぶ」としてスタートした。

運営体制

・名　称　小金原6-7元気くらぶ
・会　場　小金原6-7会館に置く
・開催日　原則として毎週金曜日
　午後2時～4時
　（ただし第5週はお休み）

運営費用

市の補助金と参加費一人当たり50円の負担で運営しております。

活動内容

介護予防に関する活動として、高齢者向け健康体操を40分程度行う。レクレーションは、輪投げ、トランプ、かるた、けん玉、オセロゲーム、休憩とおしゃべりタイム、合唱、輪唱等も行う。

参加者数の推移と募集方法

各階段下にポスターを掲示している。最近は、口コミでの参加者が増え、6―7地区以外からの参加者も目立つようになった。

参加者の反応は、毎回、出会うことによりお話しする機会が増えたと喜ばれている。

運営上の課題と今後の目標

隣の家に遊びに行くつもりで気軽に出かけ、人とのふれあいや元気作りができる場として提供できることを目標として、独居や孤立の人が、一人でも多く参加しやすい場にして、楽しい通いの場を目指したい。

小金原九丁目「ひばりの会」愛称「憩いのサロン」

立ち上げの背景

松戸市の担当課により平成27年12月「高齢者を中心とした元気作りの通いの場を新年度より実施する方針と、それに伴う住民グループを募集予定」の案内に接しました。引き続き、広報まつどに公募・募集の具体的方法が掲載され、九丁目の町会、わかば会(老人会)、民生委員、高齢者支援連絡員の方々を中心に応募すべきかの検討結果、九丁目全体の高齢化対策として応募したのが立ち上げの背景です。

スタート時期と運営体制

今年の2月担当課である介護制度改革課あて、担当課が求める必要事項を記入し提出した結果、「九丁目会館」を会場として、「小金原九丁目ひばりの会」の愛称を「憩いのサロン」として4月スタートとなりました。

実施内容

原則毎週金曜日、午前10時30分～午後3時まで、健康体操(ストレッチ)・囲碁・将棋・けん玉・オセロゲームなど(10月からは、健康麻雀を検討中)ほか健康測定、音楽鑑賞会等を予定。参加料金は、飲み物代として百円(お代わり自由)のみ。

組織体制

代表を含め役員は7名、スタッフは、ボランティアなどの経験豊富な女性9名、事務局として男性1名が当番表により交代で「おもてなし」をしています。

今までの反省

現時点で振り返っての反省点は、参加者の盛り上がりがいまひとつ少ないのは、PRの不足ではないかと思います。町会便りには2回ほど掲載していただいて町会全体にPRできたかの錯覚がありました。今後は、紙上のPRだけではなく、口コミのPRが不可欠である思います。

最近の『オカリナコンサート』は、直近にもかかわらず55名の参加者があったのは、口コミ作戦の成果だと痛感しました。

今後の目標

今年度で市の補助金は終了となり今後は会の自主運営となります。現在、わが町には、「町会」、「わかば会」の会員組織があり、連携して共に高齢者対策、敬老対策を行い、真の「憩いのサロン」を定着させることです。

つながり　ひろげて　明日（みらい）へ 『こども食堂』編

多様性・地域性・連携の重視を合言葉に！

子ども食堂は、子ども（あるいは子育て中の親）の孤立や貧困に対する新たな取り組みとして全国的に広がりを見せています。松戸市内それぞれの地域の実情に合わせた活動を3ヶ所（市内で現在4ヶ所が確認されている。）ご紹介します。地域福祉の観点から、今後民生委員・児童委員のかかわりが大いに期待される活動だということが分かった取材でした。

deあいこども食堂（馬橋）

毎週金曜日16:30～20:30

小さな子どもからおじいちゃん、おばあちゃんまでが楽しく食卓を囲んでいる、そんな大家族をイメージしています。

年齢も学校も異なる人たちとの交流のなかで、子どもたちは自然に社会を学んでいます。

新松戸子ども食堂　第1土曜日11:00～

@松戸くらしの助っ人事務所（新松戸）

子どもの孤食は身近なこと、と運営メンバーの一人がショックを受けたことから始まった。

「地域で行う子育て・自然と声を掛け合える社会」を目指して！

元民生・児童委員や地域で活動するNPOの協力を得ながら、地域に開かれた、子どももひとりで来ることのできる"みんなの食堂"を目指している。

こがねはら子ども食堂_よっけ塾

毎週土曜日10:00～15:00

♪いつもひとりで食事をしている子
♪ひとりの家に帰るのが嫌で外で宿題している子
♪勉強したくても家庭の事情で塾に行けない子のことを思って始められた。

勉強したい人
お昼ごはんを
みんなで食べたい人
みんな　まってるよ。

「無料学習支援」を柱にすえている。

共通する課題は

・資金と場所の確保
・マンパワー
（調理・食材提供、保育・見守り）
・地域活動との連携

そして、「食事が十分にできない子がくる場所」というイメージにならないよう、「子どもとみんなの集いの場・サロン」として運営していくことがあげられました。

民生・児童委員に期待される役割として大きく2点あげることができます。

・本当に食事を必要としている子どもや家庭が利用できるよう活動を周知すること
経済的な困窮対策にとどまらず、大人の関わりに飢えている地域の子どもたちを、どう地域で見守り子ども食堂につないでいくか、他機関との連携が必要になります。

・子ども食堂を利用している子どもや家庭を様々な支援策へとつなぐこと
困り感を抱えていながらも、支援を得られていない子どもや家庭に様々なサービスを紹介し、時には直接支援することが必要になります。

未来を担うすべての子どもたちの健やかな育ちを地域で支える活動です。

企業・地域と共に

私達は「つながりひろげて」というテーマを掲げてこの3年間「愛の小鳩」を作ってきました。今回、地域に根ざした活動をしている企業に目を向けてみました。

ヤクルトを配達する人をヤクルトレディと呼びます。ヤクルトレディは担当地域を持ちそれをほとんど変えることはないそうです。自分の担当地区に住んでいる人をよくみるように指導しています。例えば、昼間一人で歩いている小さな子ども、ひどい泣き声が聞こえる家、窓が開いているのに呼びかけても誰も出てこない家など、毎日の配達の中でいつもと違う場面に遭遇した時に決してそのままにしないようにということです。まずマネージャーに連絡、指導を受けるばかりではなく自分の担当地区の町会長、民生委員を把握しその人に伝えるなどその場で疑問点を解決していきます。ほとんどの場合取り越し苦労に終わる事も多いそうですが、年に数回は家で倒れている人を発見したりすることもあるそうです。毎週お届けしている家でも、今日はちょっと様子が変だと思ったときや、最近ちょっと認知症になってきたようだと思われる人には週2回訪ねるなどしています。また、具合が悪いとか怪我をしたとかいう人がいた場合はちょこっと買い物に行きます。また、高齢者のお宅は最後にまわしてお話を聞くようにと、指導しています。

まだ自分の地域ではヤクルトレディと接点がないという民生委員の皆さんもどうぞヤクルトレディと話してみてください。生きた情報を得られ早めに行動をおこして何かを防ぐことができたらと思います。

ヤクルト以外でもこういう活動をしている企業はあります。京葉ガスでは松戸市の委託を受け、市から依頼があった場合、見守りをしているとの事です。コンビニの多くは災害時の支援に協力する事になっています。

新聞配達店では、郵便受けがたまっている場合や、集金時に出てこられない家などを配達員同士で情報を交換し見守っているそうです。また、これ以外にも地域に根ざした活動をしている企業、商店は沢山ありますが、連携が取れていない場合が多いのではないかと思います。

これからの民生委員はこういう方々ともつながりをひろげて生きた情報を得て事前に事故や不幸な出来事を防ぐことができたならと思うのです。

松戸市でも全人口に対する65才以上の割合が25%を超えたそうです。できるだけ多くの目で、地域を見守っていけたらと思います。

民生・児童委員活動に思う

私は一期目として、三年が終わろうとしております。

民生分野は初めての経験ですので、細かくは理解していないのが現状でした。側面的には、多岐に亘り活動分野が広いので大変だなと感じておりました。社会福祉関係、介護支援相談、地域とのふれあい活動など数々の経験をさせて頂きました。

最初は重荷でしたが、少しでも一端を担えればと思い、早や三年が経過しようとしています。今一番思う事は、携わって良かったということです。私自身が社会に関わることができる学習の場でありました。仲間ができボランティアの大切さを知り、責任感を持ち社会貢献が出来たことに感謝しております。一例として、孤独死に立ち会ったこと、高齢独居者の見守り訪問活動の重要性に触れたこと、家庭環境からの不登校問題に接してきたことなど、社会の様々な現状を見て、自分が生きていく中で考えさせられる思いが生まれたことです。

先日、民生委員全国モニター調査に、社会的孤立を背景とする住民課題を明確化し支援提言して現実につなげるアンケートがありました。これからの超少子高齢社会を迎え、ますます「無縁社会現象」が現れてくると言われております。高齢者が安心して生活できる社会構築をするために、各自治体を中心とした対策が急がれている現状です。

「人」「生活」を中心に考え温かい人間の絆と生きがいを感じる住み慣れた地域社会が、コミュニティーによって支えられる事を願っています。

地域社会との絆、家族との絆を改めて認識し、「困った時はお互いさま」という理念をもって次へと「つながり　ひろげて」を原点に二期目の活動に入ろうと考えております。

訃報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

橋本　一枝（享年75歳）

明第四地区　平成28年7月26日

一枚の写真　あれから五年・・・・

それは一枚の写真から始まりました。

　今年三月十一日のY新聞の千葉版に掲載された親子の写真には「松戸で出産もうすぐ五歳」の見出しがありました。記事の内容から以前東日本大震災直後の「愛の小鳩」の表紙に出ていた赤ちゃんの事を思い出したのです。

　前代未聞の被害の直後に誕生した命が、五年後には成長して保育園に通っている…どんな苦境の中でも人間は生き抜く力を持っているのだと、その写真を見てとても感動しました。

　この家族の現在を知りたいと思い取材をお願いしました。

　小野さんご夫婦で、いわき市のご出身です。小野さんは、放射性物質の環境汚染が心配でお姉さんの居る横浜を目ざし避難している途中都内に入る前に何か情報を得たいと検索した結果、一番近い松戸市役所を訪ねました。そこで紹介された東漸寺の避難所でお世話になり、それが縁で今も松戸市内にお住まいです。

　見ず知らずの土地での避難所生活はどんなに大変だったか伺ったところ、「今まで生活できたのは市役所の皆さん、東漸寺のご住職と奥様その他大勢の皆さんのお陰でとても感謝しています。」と言っていました。

　小野さんが一番心配していたのは子ども達の事でしたが、大人よりも環境に慣れ友だちもでき元気に学校に通ってくれたのが嬉しかったそうです。どんなに辛く大変な状況でも決して希望を捨てずに、ご夫婦で子供たちを見守り頑張ってきました。最近やっと松戸にも慣れ、今は４人にふえた子ども達の成長を見届けるまで、このまま松戸に住むことを決断されました。

　松戸は、環境と交通の便が良く大変住みやすい所だと小野さんは言います。もしも高速道路が使えない時でも、国道六号線を北上すれば、故郷のいわきへ帰れる事も、決断の理由のひとつとのことでした。

　東漸寺の避難所では、食事の前に「今を生きんが為に、この食をいただきます。」と皆で唱えていたそうです。以前だったら食事はごく当たり前と思っていたことが、実は当たり前ではなく、この言葉の深い意味を今も心にきざんで日々感謝の思いを忘れずにいたいと小野さんは語っていました。明るく話しながらも、時折見せる深いまなざし……。故郷で暮らす両親を想い、友人・知人を想う瞬間なのでしょうか？みんなで幸せになれる方法を模索しているようでした。

　小野さんご一家の健康と故郷いわきの復興を心からお祈りしています。

〈編集後記〉

昨日より今日、明日へと「つながりひろげて」

　発行（49号）を振り出しに、一期3年間・計6回発行。活動中には様々なことがありましたが今期最後の「愛の小鳩」を発行できたことに広報委員一同安堵と感謝の気持ちでいっぱいです。

　この3年間の広報委員の活躍には目を見はるものがありました。委員それぞれの個性を生かし、関係先の取材、調査、情報の収集など大変な努力を重ねて広報誌を作り上げました。「愛の小鳩」の配布部数も大幅に増えて、各地区の施設、学校、公共機関、地域の関係者や民生委員が関係する方々に、より理解を深めてもらうために努力致しました。民生委員児童委員活動の理解と地域活動への理解に繋がったのではないかと思います。

　広報委員会を側面から支えていただいた関係各機関を始め、誌面作りに協力していただいた方々、企画への視点、注意点など、ご指導していただいた皆様にも感謝致します。

　特に陰ながら支えていただいた民生委員児童委員を卒業された先輩諸氏の励ましは誌面を作るうえで大きな力になりました。今後も「愛の小鳩」が続く限り支えていただきたいと思います。

　来年は民生委員制度創設100周年を迎えますが、これからの民生委員児童委員活動を担う方々を育てる広報誌になることを期待しております。

　これまでのご協力を心より御礼申し上げます。

広報委員会委員長　川島　輝彦

（表紙の写真は松戸市立矢切小学校の稲刈り風景です。）